実践哲学ノート（8）

谷口　孝男

Notizen über die praktische Philosophie（8）

Takao TANIGUCHI*

Abstract

Diese Arbeit behandelt die praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas.Seine praktische Philosophie kann die von der Menschlichkeit（Humanität）heißen.Dabei zugleich will ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

第三章　「Ⅰ－2　哲学者と知恵―カントのフィロソフィアについて―」

第二節　「二　第四の問いの意義」

【補論１】［カントの主要著作の読解］

（α）『道徳形而上学の基礎づけ』［Ⅲ］

(81)

「［定言命法はいかにして存立可能であるかの探究］それゆえ,問題は,行為［生きること］をつねに次のような格率に従って，すなわちその格率についてそれが普遍的法則として役立つべき［sollen］ことを理性的存在者が自ら意欲することができる［wollen können］ような，そうした格率に従って判定［価値判断］すべきであるということが，はたしてあらゆる理性的存在者［homo noumenon］に対する必然的法則［定言命法］であるか，ということである．このような［必然的］法則が存在すれば，それ［必然的法則＝定言命法］は（まったくアプリオリに）すでに理性的存在者一般の［善い］意志の概念［本書第15段落参照］と結び付いていなければならない．・・・・・・実践哲学においてわれわれにとって肝要なのは，生起する［geschehen］ことの根拠を想定することではなく，たとえ決して生起しないとしても生起すべき［geschehen sollen］ことの法則を，すなわち客観的＝実践的法則［定言命法］が問題であり，したがって［善い］意志が自らをたんに［実践］理性によって規定する限りにおいて，［善い］意志の自己自身に対する関係が問題である．この場合経験的なものに関係するすべてはおのずからにして脱落

するが，それと言うのも，［実践］理性がひとりおのれのみで行動［生きること］を規定する（このことの可能性をわれわれはいま探究しようとしているのだが）とすれば，［実践］理性はこのことを必然的にアプリオリになさなければならないから［いまや道徳形而上学への一歩を踏み出すことが必要］なのである．（Die Frage ist also diese：ist es ein nothwendiges Gesetz für alle vernünftige Wesen,ihre Handlungen jederzeit nach solchen Maximen zu beurtheilen,von denen sie selbst wollen können,daß sie zu allgemeinen Gesetzen dienen sollen？Wenn es ein solches ist,so muß es（völlig a priori）schon mit dem Begriffe des Willens eines vernünftigen Wesens überhaupt verbunden sein.・・・・・・In einer praktischen Philosophie,wo es uns nicht darum zu thun ist,Gründe anzunehmen von dem,was geschieht,sondern Gesetze von dem,was geschehen soll,ob es gleich niemals geschieht,d.i.objectiv＝praktische Gesetze：・・・・・・Hier aber ist vom objectiv＝praktischen Gesetze die Rede,mithin von dem Verhältnisse eines Willens zu sich selbst,so fern er sich bloß durch Vernunft bestimmt,da denn alles,was aufs Empirische Beziehung hat,von selbst wegfällt：weil,wenn die Vernunft für sich allein das Verhalten bestimmt（wovon wir die Möglichkeit jetzt eben untersuchen wollen）,sie dieses nothwendig a priori thun muß.）」（前掲『道徳形而上学の基礎づけ』，122～123頁）

＊「すぐれた魂とは何か」「善い意志とは何か」「善く生きるとはどういうことであるか」（それらは道徳的善悪の判定＝価値判断の規準となる）を問い求めて，カントはまず「義務」をとりあげた．そこでまず，当然のことながら，（1）「義務はいかにして存立可能であるか？」という問いを探究した．義務の存立可能性の根拠は，「定言命法」にあった．そこで次に，（2）「定言命法はいかにして存立可能であるか？」という問いに答えなければならない．

(82)

「［仮言命法の存立可能性の根拠］［①意志］意志［魂］は，ある法則の表象に適合して自己自身を行為［生きること］へと規定する能力と考えられる．そしてこのような能力は，ただ理性的存在者［homo noumenon］のうちにのみ見いだされることができる．［②目的］ところで，意志にとってその自己規定の客観的根拠として役立つものは目的［Zweck］であり，それがたんなる［実践］理性によって与えられる場合は，あらゆる理性的存在者にひとしく妥当するはずである．［③手段］これに反して，自らの結果を目的とする行為［生きること］の可能性の根拠を含むにすぎないものは，手段［Mittel］とよばれる．［④動機］欲求［生きること］の主観的根拠は動機［Triebfeder］であり，［⑤動因］意欲［生きること］の客観的根拠は動因［Bewegungsgrund］である．［⑥主観的目的と客観的目的］それゆえ，動機に基づく主観的目的［der subjective Zweck］と，あらゆる理性的存在者に妥当する動因に基づく客観的目的［der objective Zweck］との間に区別が生ずる．［⑦形式的な実践的原理］実践的原理［生きる方針］は，それがあらゆる主観的目的を度外視するとき，形式的［形相的・formal］である．［⑧実質的な実践的原理］だが実践的原理［生きる方針］が主観的目的を，したがってある動機を根拠とするとき，その［実践的］原理は実質的［material］である．［⑨仮言命法の根拠としての相対的目的］ある理性的存在者が任意に自らの行為［生きること］の結果として企てる目的（実質的目的）は，ことごとくたんに相対的である．なぜなら，それらの目的に価値を与えるのは，ただたんにそれらの目的が主観のそれぞれ特殊な欲求能力［生きる能力］に対してもつ関係であって，それゆえこの価値は，普遍的な原理を，つまりあらゆる理性的存在者に，したがってまたあらゆる意欲［生きる

こと］に妥当する必然的原理を，すなわち実践的法則［善く生きる方針］を，提供することができないからである．それゆえ，これらすべての相対的目的［der relative Zweck］は，たんに仮言命法の根拠であるにすぎない．（Der Wille wird als ein Vermögen gedacht,der Vorstellung gewisser Gesetze gemäß sich selbst zum Handeln zu bestimmen.Und ein solches Vermögen kann nur in vernünftigen Wesen anzutreffen sein.Nun ist das,was dem Willen zum objectiven Grunde seiner Selbstbestimmung dient,der Zweck,und dieser,wenn er durch bloße Vernunft gegeben wird,muß für alle vernünftige Wesen gleich gelten.Was dagegen bloß den Grund der Möglichkeit der Handlung enthält,deren Wirkung Zweck ist,heißt das Mittel.Der subjective Grund des Begehrens ist die Triebfeder,der objective des Wollens der Bewegungsgrund；daher der Unterschied zwischen subjectiven Zwecken,die auf Triebfedern beruhen,und objectiven,die auf Bewegungsgründe ankommen,welche für jedes vernünftige Wesen gelten.Praktische Principien sind formal,wenn sie von allen subjectiven Zwecken abstrahiren；sie sind aber material,wenn sie diese,mithin gewisse Triebfedern zum Grunde legen.Die Zwecke,die sich ein vernünftiges Wesen als Wirkungen seiner Handlung nach Belieben vorsetzt,（materiale Zwecke）sind insgesammt nur relativ；denn nur bloß ihr Verhältnis auf ein besonders geartetes Begehrungsvermögen des Subjects giebt ihnen den Werth,der daher keine allgemeine für alle vernünftige Wesen und auch nicht für jedes Wollen gültige und nothwendige Principien,d.i.praktische Gesetze,an die Hand geben kann.Daher sind alle diese relative Zwecke nur der Grund von hypothetischen Imperativen.）」（同上，124～125頁）

*一般に，「形式（形相）」は能動性の原理（働きかけるもの）をなし，「実質」は受動性の原理（働きかけられるもの）をなす．「形式（形相）」は「実質」に働きかけて，「実質」を「形あるもの」に「形作る」のである．カントの理論的認識論においてもそうであって，「感性」が「実質」，「悟性」が「形式（形相）」である．定言命法は「形式的な実践的原理」によってしか成立しない，とカントは主張する．行為（生きること）は，その実質から見れば個人的で種々雑多であるが，形式から見れば普遍的であることができる．「すぐれた魂」「善い意志」「善く生きる」などの内容が，人によって異なるとは考えずらい．いな，人によって異なってよいとは思えない．「人間らしさ」の内容は，万人共通であろう．定言命法という普遍的客観的「形式（形相）」が，各人の人生という「実質」を統一的に，また首尾一貫して「形作る」のである．

なお，ヘーゲルは「形式」と「実質」の上述の関係を極端にまで押し進め，一種の「形式主義」の考えを採った．『論理学』は「形式」であり，『実在哲学（自然哲学と精神哲学）』は「実質」であるが，後者は「応用論理学」あるいは「論理学の影」とされる．マルクスは，『資本論』の「労働過程論」において，「形式」と「実質」との関係を，概ね妥当な仕方で捉えた，と評価してよい，と思われる．マルクスの「労働論」の詳細については，拙著『意識の哲学ーーヘーゲルとマルクスーー』（1987・11，批評社）を見られたい．

(83)

「［定言命法の存立可能性の根拠］ところで，それの現存それ自体が絶対的価値［ein absoluter Werth］をもち，目的それ自体［Zweck an sich selbst］として，一定の法則の根拠であることができるようなあるものが存在するとすれば，そのもののうちに，そしてそのもののうちにのみ，［存立］可能な定言命法の根拠が，すなわち実践的法則の根拠が存在することになろう．（Gesetzt aber,es gäbe etwas,dessen Dasein an sich selbst einen absoluten Werth hat,was als Zweck

an sich selbst ein Grund bestimmter Gesetze sein könnte,so würde in ihm und nur in ihm allein der Grund eines möglichen kategorischen Imperativs,d.i.praktischen Gesetzes,liegen.)」(同上，125頁)

(84)

「[人格の絶対的価値と物件の相対的価値] さて，私は言う．人間および一般にあらゆる理性的存在者は，目的それ自体 [Zweck an sich selbst] として現存し，あれこれの意志によって任意に使用される手段 [Mittel] としてのみ現存するのではなく，自分自身にむけられた行為においても，他の理性的存在者にむけられた行為においても [対自的にも対他的にも] あらゆる行為においてつねに同時に [jederzeit zugleich] 目的 [Zweck] として見られなければならない，と．傾向性のすべての対象は，たんに条件づけられた価値 [ein bedingter Werth] をもつにすぎない．なぜなら，傾向性とそれに基づいた欲求とが存在しなければ，それらの対象は価値をもたないであろうからである．ところで欲求の源泉としての傾向性自身も，それ [傾向性] 自身のゆえに願望されるといった絶対的価値を決してもたず，かえって傾向性からまったく自由であるということ [gänzlich davon frei zu sein] が，すべての理性的存在者 [homo noumenon] の普遍的願望であるはずである．それゆえ，われわれの行為によって獲得されるべきすべての対象 [Gegenstand] の価値は，つねに条件づけられている．その現存がわれわれの意志にではなく，自然に基づいている存在者でも，その存在者が理性をもたない存在者である場合は，手段としてただ相対的価値 [ein relativer Werth] をもつにすぎず，それゆえ物件 [Sache] とよばれる．これに反して，理性的存在者は人格 [Person] とよばれるが，その理由は，このものの本性 [理性] がこのものをすでに目的それ自体として，すなわちたんに手段としてのみ用いられてはならないものとして，際立たせており，したがってその限りにおいて [このものに対する] あらゆる随意を制限する（そして尊敬 [Achtung] の対象である）からである．このものは，それゆえ，たんなる主観的目的ではない，つまりその現存がわれわれの行為の結果としてわれわれに対して価値をもつ主観的目的ではない．そうではなくて，このものは客観的目的である，すなわちその現存それ自体が目的であるようなものであり，しかもその目的のかわりに，このものがたんに手段として役立つようなほかのいかなる目的も置き換えることができないようなものなのである．なぜなら，もしそうでなければ，絶対的価値 [ein absoluter Werth] をもつものはどこにもまったく見いだされないことになろう．ところですべての価値が条件づきであり，したがって偶然的であるならば，[実践] 理性にとって最高の実践的原理 [定言命法・善く生きるための最高の知恵] はどこにも見いだされることができなくなるであろう．(Nun sage ich：der Mensch und überhaupt jedes vernünftige Wesen existirt als Zweck an sich selbst,nicht bloß als Mittel zum beliebigen Gebrauche für diesen oder jenen Willen,sondern muß in allen seinen sowohl auf sich selbst,als auch auf andere vernünftige Wesen gerichteten Handlungen jederzeit zugleich als Zweck betrachtet werden.Alle Gegenstände der Neigungen haben nur einen bedingten Werth；denn wenn die Neigungen und darauf gegründete Bedürfnisse nicht wären,so würde ihr Gegenstand ohne Werth sein.Die Neigungen selber aber als Quellen des Bedürfnisses haben so wenig einen absoluten Werth,um sie selbst zu wünschen,daß vielmehr,gänzlich davon frei zu sein,der allgemeine Wunsch eines jeden vernünftigen Wesens sein muß. Also ist der Werth aller durch unsere Handlung zu erwerbenden Gegenstände jederzeit bedingt.Die Wesen,deren Dasein zwar nicht auf unserm Willen,sondern der Natur beruht,haben dennoch,wenn sie vernunflose Wesen sind,nur einen rela-

tiven Werth,als Mittel,und heißen daher Sachen,dagegen vernünftige Wesen Personen genannt werden,weil ihre Natur sie schon als Zwecke an sich selbst,d.i.als etwas,das nicht bloß als Mittel gebraucht werden darf,auszeichnet,mithin so fern als Willkür einschränkt（und ein Gegenstand der Achtung ist）. Dies sind also nicht bloß subjective Zwecke,deren Existenz als Wirkung unserer Handlung für uns einen Werth hat；sondern objective Zwecke,d.i.Dinge,deren Dasein an sich selbst Zweck ist und zwar ein solcher,an dessen Statt kein anderer Zweck gesetzt werden kann,dem sie bloß als Mittel zu Diensten stehen sollten,weil ohne dieses überall gar nichts von absolutem Werthe würde angetroffen werden；wenn aber aller Werth bedingt,mithin zufällig wäre,so könnte für die Vernunft überall kein oberstes praktisches Princip angetroffen werden.)」（同上，126～127頁）

(85)

「[定言命法の目的自体の方式] さて，最上の実践的原理［善く生きるための最上の方針］が，そして人間の意志にかんして定言命法が存在するとすれば，その原理は，目的それ自体［Zweck an sich selbst］であるという理由で必然的にすべてのひとにとって目的であるものの表象から，意志の客観的原理を取り出し，したがって普遍的な実践的法則として役立ちうるような，そうした原理でなければならない．この原理の根拠は，理性的存在者は目的それ自体として現存する，ということである．人間は自分自身の現存を必然的にそのようなものとして表象するが，その限りにおいてこの原理は人間の行為の主観的原理である．しかしほかのすべての理性的存在者も，自らの現存を，私にとっても妥当する同一の理性根拠に従って，そのようなものとして表象する*．それゆえこの原理は同時に客観的原理であって，この原理を最上の実践的根拠として，そこから意志のすべての法則が導出されることができるに違いない．実践的命法は，それゆえ，次のようになろう．「汝の人格やほかのあらゆるひとの人格のうちにある人間性を，いつも同時に目的として扱い，決してたんに手段としてのみ扱わないように行為せよ［生きよ］.」

この命題を，私はここでは要請［Postulat］として掲げておく．この命題の根拠［Gründe］は最終章において見いだされるであろう．（Wenn es denn also ein oberstes praktisches Princip und in Ansehung des menschlichen Willens einen kategorischen Imperativ geben soll,so muß es ein solches sein,das aus der Vorstellung dessen,was nothwendig für jedermann Zweck ist,weil es Zweck an sich selbst ist,ein objectives Princip des Willens ausmacht,mithin zum allgemeinen praktischen Gesetz dienen kann.Der Grund dieses Princips ist：die vernünftige Natur existirt als Zweck an sich selbst.So stellt sich nothwendig der Mensch sein eignes Dasein vor；so fern ist es also ein subjectives Princip menschlicher Handlungen.So stellt sich aber auch jedes andere vernünftige Wesen sein Dasein zufolge eben desselben Vernunftgrundes,der auch für mich gilt,vor；also ist es zugleich ein objectives Princip,woraus als einem obersten praktischen Grunde alle Gesetze des Willens müssen abgeleitet werden können.Der praktische Imperativ wird also folgender sein：Handle so,daß du die Menschheit sowohl in deiner Person,als in der Person eines jeden andern jederzeit zugleich als Zweck,niemals bloß als Mittel brauchst.

*Diesen Satz stellte ich hier als Postulat auf.Im letzten Abschnitte wird man die Gründe dazu finden.)」（同上，128～129頁）

*以上の（83）（84）（85）の三段落は，カントの実践哲学にとって本質的と言うべきであろう．それはそれとして，このように，定言命法の存立根拠は，ひとまず，「人格」としての人間のうちに発見された．しかし，まだ，肝心の「人格とは何か」が明らかにされていない．それが明らかにされない限り，定言命法の存立根拠は最終的に解明されたとは言い得ないであろう．

(86)

「[①自分自身に対する完全義務に違反した行為] 先の実例をここでも用いるとすれば，まず第一に，自殺を企てているひとがいて，そのひとが自分自身に対する必然的な義務の概念にかんして，自分の行為が目的それ自体としての人間性の理念［Idee］と両立することができるであろうか，と自問するとしよう．かれが労苦に満ちた状態から逃れようとして自分自身を滅ぼすとすれば，かれは一つの人格をたんに，我慢できる状態を一生の最後まで維持するための一つの手段として用いているにすぎない．人間はしかし物件ではなく，したがってたんに手段としてのみ扱われることはできず，かれのあらゆる行為［生きること全般］に際していつも目的それ自体として見られなければならない．それゆえ，私は，私の人格のうちにある人間［der Mensch in meiner Person］を勝手に処理し，それを損なったり駄目にしたり殺したりすることはできない．(Um bei den vorigen Beispielen zu bleiben,so wird Erstlich nach dem Begriffe der nothwendigen Pflicht gegen sich selbst derjenige,der mit Selbstmorde umgeht,sich fragen,ob seine Handlung mit der Idee der Menschheit als Zwecks an sich selbst zusammen bestehen könne.Wenn er,um einem beschwerlichen Zustande zu entfliehen,sich selbst zerstört,so bedient er sich einer Person bloß als eines Mittels zu Erhaltung eines erträglichen Zustandes bis zu Ende des Lebens.Der Mensch aber ist keine Sache,mithin nicht etwas,das bloß als Mittel gebraucht werden kann,sondern muß bei allen seinen Handlungen jederzeit als Zweck an sich selbst betrachtet werden.Also kann ich über den Menschen in meiner Person nichts disponiren,ihn zu verstümmeln,zu verderben,oder zu tödten.)」（同上，130頁）

(87)

「[②他人に対する完全義務に違反した行為] 第二に，他人に対する必然的もしくは責務的な義務にかんしては，他人に対して嘘の約束をしようと思っているひとは，かれが他人を，同時に目的をそのうちに含む者［dieser zugleich den Zweck in sich enthalte］としてではなく，たんに手段として用いようとしていることに，ただちに気付くであろう．なぜなら，私がこうした約束によって私の意図のために用いようとしているひとは，私がかれに対してなすやり方に同意することは不可能であり，それゆえかれ自身がこの行為の目的を含むことは不可能だからである．他人の原理とのこの相反は，他人の自由や財産に対する侵害という例を引くと，いっそうはっきりする．なぜなら，この場合，人間の権利の侵害者が他人の人格をたんに手段として用いようとしていて，その他人が理性的存在者としていつも同時に［jederzeit zugleich］目的として，すなわちまさに同じ行為にかんしてその人間のうちにも目的を当然含みうるような者としてのみ評価されるべきなのに，そのことを考慮していないことは明白だからである*．

*ここで通俗的なquod tibi non vis fieri etc.［汝がなされたくないことを他人にしてはならない］※が規準もしくは原理として役立つことができる，と考えてはならない．なぜなら，この言は，さまざまな制限を伴ってではあるが，ただ上述の原理［定言命法の目的自体の方式］からのみ導

かれるのである．と言うのも，この言は，自分自身に対する義務の根拠も，他人に対する愛の義務の根拠も含んでいないし（なぜなら，多くのひとは，他人に親切を示すことを免れさえすれば，他人がかれに親切をしなくてよいということを喜んで認めるであろうから），最後に相互的な責務的義務の根拠をも含んでいないからである．なぜなら，犯罪者は上述の言を根拠として，かれを罰する裁判官を論難するであろうし，またこれに似た事柄が生ずるからである．

※周知のように，『論語』のなかで，孔子は、仁の根本命題として，「己れの欲せざる所を人に施すこと勿かれ」（15－24）と語っている．（Zweitens,was die nothwendige oder schuldige Pflicht gegen andere betrifft,so wird der,so ein lügenhaftes Versprechen gegen andere zu thun im Sinne hat,sofort einsehen,daß er sich eines andern Menschen bloß als Mittels bedienen will,ohne daß dieser zugleich den Zweck in sich enthalte.Denn der,den ich durch ein solches Versprechen zu meinen Absichten brauchen will,kann unmöglich in meine Art,gegen ihn zu verfahren,einstimmen und also selbst den Zweck dieser Handlung enthalten.Deutlicher fällt dieser Widerstreit gegen das Princip anderer Menschen in die Augen,wenn man Beispiele von Angriffen auf Freiheit und Eigenthum anderer herbeizieht.Denn da leuchtet klar ein,daß der Übertreter der Rechte der Menschen,sich der Person anderer bloß als Mittel zu bedienen,gesonnen sei,ohne in Betracht zu ziehen,daß sie als vernünftige Wesen jederzeit zugleich als Zwecke,d.i.nur als solche,die von eben derselben Handlung auch in sich den Zweck müssen enthalten können,geschätzt werden sollen.

*Man denke ja nicht,daß hier das triviale：quod tibi non vis fieri etc.zur Richtschnur oder Princip dienen könne.Denn es ist,obzwar mit verschiedenen Einschränkungen,nur aus jenem abgeleitet；es kann kein allgemeines Gesetz sein,denn es enthält nicht den Grund der Pflichten gegen sich selbst,nicht der Liebespflichten gegen andere（denn mancher würde es gerne eingehen,daß andere ihm nicht wohlthun sollen,wenn er es nur überhoben sein dürfte,ihnen Wohlthat zu erzeigen）,endlich nicht der schuldigen Pflichten gegen einander；denn der Verbrecher würde aus diesem Grunde gegen seine strafenden Richter argumentiren,u.s.w.）」（同上，131～132頁）

(88)

「[③自分自身に対する不完全義務に違反した行為] 第三に，自分自身に対する偶然的な（功績的な）義務にかんしては，行為［生きること］がわれわれの人格のうちの目的それ自体としての人間性に相反しないというだけでは不十分で，行為［生きること］はさらにそうした人間性に調和し［zusammenstimmen］なければならない．ところで人間性のうちには，より大きな完全性［Vollkommenheit］にむかう素質があって，この素質はわれわれの主体のうちの人間性にかんする自然の目的に属している．この素質をなおざりにすることは，目的それ自体としての人間性を維持すること［Erhaltung］とはともかく両立することができるとしても，この目的を促進すること［Beförderung］とは両立することができないであろう．（Drittens,in Ansehung der zufälligen（verdienstlichen）Pflicht gegen sich selbst ists nicht genug,daß die Handlung nicht der Menschheit in unserer Person als Zweck an sich selbst widerstreite,sie muß auch dazu zusammenstimmen.Nun sind in der Menschheit Anlagen zu größerer Vollkommenheit,die zum Zwecke der Natur in Ansehung der Menschheit in unserem Subject gehören；diese zu vernachlässigen,würde allenfalls wohl mit der Erhaltung der Menschheit als Zwecks an sich selbst,aber nicht der

Beförderung dieses Zwecks bestehen können.)」(同上，133頁)

(89)

「[④他人に対する不完全義務に違反した行為] 第四に，他人に対する功績的義務にかんして言うと，すべての人間がもつ自然目的 [Naturzweck] は，自分自身の幸福 [ihre eigene Glückseligkeit] である．ところで，誰も他人の幸福 [des andern Glückseligkeit] になにも寄与せず，その際また他人の幸福から故意になにも奪わないとしても，確かに人間性は存立することができるであろう．けれどもこのことは，誰も他人の目的を可能な限り促進しようと努めない以上，目的それ自体としての人間性と消極的に合致する [eine negative Übereinstimmung] だけで，積極的に合致すること [eine positive Übereinstimmung] にはならない．なぜなら，目的それ自体である主体がもつ諸目的は，上述の考えが私において十分な効果を発揮すべきであるとすれば，できるだけ私の目的とならなければならないからである．(Viertens,in Betreff der verdienstlichen Pflicht gegen andere ist der Naturzweck,den alle Menschen haben,ihre eigene Glückseligkeit.Nun würde zwar die Menschheit bestehen können,wenn niemand zu des andern Glückseligkeit was beitrüge,dabei aber ihr nichts vorsetzlich entzöge；allein es ist dieses doch nur eine negative und nicht positive Übereinstimmung zur Menschheit als Zweck an sich selbst,wenn jedermann auch nicht die Zwecke anderer,so viel an ihm ist,zu befördern trachtete.Denn das Subject,welches Zweck an sich selbst ist,dessen Zwecke müssen,wenn jene Vorstellung bei mir alle Wirkung thun soll,auch,so viel möglich,meine Zwecke sein.)」(同上，134頁)

(90)

「[定言命法の自律の方式] 人間性ならびにすべての理性的存在者一般が目的それ自体としてあるというこの原理 [目的自体の方式] は (これはそれぞれの人間の行為 [生きること] の自由の最高の制限的条件であるが)，経験から借用したものではない．[その理由は] 第一に，この原理 [目的自体の方式] は普遍性をもつからで，それはこの原理 [目的自体の方式] があらゆる理性的存在者一般にかかわるからであるが，経験はこの原理 [目的自体の方式] の普遍性についてなにかを規定するには不十分だからである．また第二に，この原理 [目的自体の方式] においては，人間性は人間の (主観的) 目的として，すなわちひとが実際に自分から自分の目的とする対象として表象されるのではなく，客観的目的として，つまりわれわれがどのような目的をもとうとも，法則 [定言命法すなわち道徳法則] としてあらゆる主観的目的の最上の制限的条件をなすべきものとして [ⓐ自他の人格の尊重は諸行為の総体からなる生きることそのものの究極目的である，ⓑそれゆえ個々の行為の諸目的の内容およびその遂行の仕方は，自他の人格の尊敬によって制限される] 表象されるからであり，したがってこの原理 [目的自体の方式] は純粋 [実践] 理性から発現しなければならないからである．すなわちあらゆる実践的立法 [善く生きるために定言命法すなわち道徳法則を立てること] の根拠は，客観的には規則のうちに，そして (第一の原理 [自然法則の方式] に従って) この規則に法則 (おそらくは自然法則) の資格を与える普遍性の形式のうちに存するが，しかし主観的には目的のうちに存するのであり，ところであらゆる目的の主体は，(第二の原理 [目的自体の方式] に従って) 目的それ自体としてのそれぞれの理性的存在者であるから，そこで以上から [善い] 意志の第三の実践的原理 [善く生きるための「自律の方式」] が，つまり [善い] 意志と普遍的実践理性とが合致する最上の条件としての実践的原理 [自律の方式] が帰結するのであって，それがすなわち，おのおのの理性的存在者の [善

い］意志が普遍的に立法する［allgemein gesetzgebend］［善い］意志であるという理念［Idee］なのである．（Dieses Prinzip der Menschheit und jeder vernünftigen Natur überhaupt,als Zwecks an sich selbst,（welche die oberste einschränkende Bedingung der Freiheit der Handlungen eines jeden Menschen ist）ist nicht aus der Erfahrung entlehnt：erstlich wegen seiner Allgemeinheit,da es auf alle vernünftige Wesen überhaupt geht,woüber etwas zu bestimmen keine Erfahrung zureicht；zweitens weil darin die Menschheit nicht als Zweck der Menschen（subjectiv）,d.i.als Gegenstand,den man sich von selbst wirklich zum Zwecke macht,sondern als objectiver Zweck,der,wir mögen Zwecke haben,welche wir wollen,als Gesetz die oberste einschränkende Bedingung aller subjectiven Zwecke ausmachen soll,vorgestellt wird,mithin es aus reiner Vernunft entspringen muß. Es liegt nämlich der Grund aller praktischen Gesetzgebung objectiv in der Regel und der Form der Allgemeinheit,die sie ein Gesetz（allenfalls Naturgesetz）zu sein fähig macht（nach dem ersten Princip）,subjectiv aber im Zwecke；das Subject aller Zwecke aber ist jedes vernünftige Wesen,als Zweck an sich selbst（nach dem zweiten Prinzip）：hieraus folgt nun das dritte praktische Princip des Willens,als oberste Bedingung der Zusammenstimmung desselben mit der allgemeinen praktischen Vernunft,die Idee des Willens jedes vernünftigen Wesens als eines allgemein gesetzgebenden Willens.）」（同上，135頁）

(91)

「［普遍的自己立法と自己服従］［善い］意志が自分でする普遍的立法［定言命法＝道徳法則・Gesetz］と両立することができないすべての格率［Maxime］は，この原理［自律の方式］によって斥けられる．［善い］意志は，それゆえ，たんに［道徳］法則に服従するのではなく，［善い］意志がまた自己立法的なもの［selbstgesetzgebend］として，そしてまさにそのゆえにはじめて［自分自身が自発的に立てた道徳法則であるがゆえにこそ］［道徳］法則（この法則について，［善い］意志は自分をその創始者［Urheber］と見ることができる）に服従すると見られなければならない，という仕方で服従するのである．（Alle Maximen werden nach diesem Princip verworfen,die mit der eigenen allgemeinen Gesetzgebung des Willens nicht zusammen bestehen können.Der Wille wird also nicht lediglich dem Gesetze unterworfen,sondern so unterworfen,daß er auch als selbstgesetzgebend und eben um deswillen allererst dem Gesetze（davon er selbst sich als Urheber betrachten kann）unterworfen angesehen werden muß.）」（同上，136～137頁）

(92)

「［定言命法の存立可能性はまだ最終的には証明されていない］先に定式化して示した命法，それは行為［生きること］の普遍的な自然秩序にも似た合法則性の命法［自然法則の方式］か，もしくは理性的存在者それ自体の普遍的な目的優越性［Zweckvorzug］の命法［目的自体の法則］であるが，これらの命法はまさに定言的として［普遍的・必然的・客観的な道徳法則として］示されたことによって，その命令する威信になんらかの関心［Interesse］が動機［Triebfeder］として混入することをすべて排除した．だがこれらの命法は，定言的であると想定された［angenommen］だけで，それと言うのも，義務の概念を解明しようとしたときに，こうしたもの［定言命法］が想定されなければならなかったからである．だが定言的に命ずる実践的命題［善く生きるための普遍的行動方針］が存在するということは，それだけで独立に証明されることはできなかったし，そうした証明はこの章［第二章］に入ってからでも，また現在の段階でも

なされることはできないのである．けれども，一つのことだけはなされることができたと言ってよいが，それはつまり，定言命法を仮言命法から区別する特徴は，義務に基づく意欲に際しては一切の関心［alles Interesse］が断絶されることにあるが，この断絶が命法そのもののうちにおいて，命法が含むある種の規定を通じて示唆された，ということであり，このことはいま示した原理の第三方式［自律の方式］のうちで，すなわちおのおのの理性的存在者の意志が普遍的に立法する［allgemeingesetzgebend］意志であるという理念［Idee］のうちで，なされているのである．(Die Imperativen nach der vorigen Vorstellungsart,nämlich der allgemein einer Naturordnung ähnlichen Gesetzmäßigkeit der Handlungen,oder des allgemeinen Zwecksvorzuges vernünftiger Wesen an sich selbst,schlossen zwar von ihrem gebietenden Ansehen alle Beimischung irgend eines Interesse als Triebfeder aus,eben dadurch daß sie als kategorisch vorgestellt wurden；sie wurden aber nur als kategorisch angenommen,weil man dergleichen annehmen mußte,wenn man den Begriff von Pflicht erklären wollte.Daß es aber praktische Sätze gäbe,die kategorisch geböten,könnte für sich nicht bewiesen werden,so wenig wie es überhaupt in diesem Abschnitte auch hier noch nicht geschehen kann；allein eines hätte doch geschehen können,nämlich：daß die Lossagung von allem Interesse beim Wollen aus Pflicht,als das specifische Unterscheidungszeichen des kategorischen vom hypothetischen Imperativ,in dem Imperativ selbst durch irgend eine Bestimmung,die er enthielte,mit angedeutet würde,und dieses geschieht in gegenwärtiger dritten Formel des Princips,nämlich der Idee des Willens eines jeden vernünftigen Wesens als allgemeingesetzgebenden Willens.)」(同上，137～138頁)

(93)

「[定言命法＝道徳法則はそれ自身が一番上に立って立法する善い意志の産物］なぜなら，われわれがそのような意志を考えるとき，なるほど［道徳］法則の下に立つ意志ならば，なおある関心［Interesse・傾向性］を介してこの［道徳］法則に繋がれることがあろうが，それ自身が一番上に立って立法する［善い］意志は，その限りでなんらかの関心［Interesse・傾向性］に依存することは不可能だからである．と言うのも，そうした依存的意志［abhängender Wille・傾向性に依存した意志］は，それ自身がさらに別の法則を，つまり意志が普遍的法則に妥当するという条件に自らの自愛の関心［Interesse seiner Selbstliebe・傾向性］を制限する法則を，必要とすることになろうからである．(Denn wenn wir einen solchen denken,so kann,obgleich ein Wille,der unter Gesetzen steht,noch vermittelst eines Interesse an dieses Gesetz gebunden sein mag,dennoch ein Wille,der selbst zu oberst gesetzgebend ist,unmöglich so fern von irgend einem Interesse abhängen；denn ein solcher abhängender Wille würde selbst noch eines andern Gesetzes bedürfen,welches das Interesse seiner Selbstliebe auf die Bedingung einer Gültigkeit zum allgemeinen Gesetz einschränkte.)」(同上，138頁)

(94)

「[定言命法の本質としての普遍的立法の理念］それゆえ，人間のおのおのの意志が自らのすべての格率を通じて普遍的に立法する意志であるという原理*は，ほかの点で正しくさえあれば，定言命法［であること］と十分に適合するが，それはこの原理が，まさに普遍的立法という理念［Idee］のゆえに，いかなる関心［傾向性］にも基づいていず，それゆえあらゆる可能な［定言］命法［の方式］のうちでこれのみが無条件的であることができる，という点においてなのである．

あるいはこの命題を逆にして，次のように言うほうがよいかもしれない．定言命法が（すなわち理性的存在者のおのおのの意志に対する法則が）存在するとすれば，この［定言］命法が命ずることができるのは，ただ次のこと，つまり同時に自分自身を普遍的に立法するものと見なすことができるような自らの意志の格率に基づいてすべてをなせ，ということである，と．なぜなら，その場合にのみ，実践的原理ならびに意志が服従する［定言］命法は，無条件的である［関心・傾向性によって条件づけられていない］からで，それはこの意志がいかなる関心［傾向性］にも基づくことができないという理由によるのである．

ここでは，この原理を解明するために実例を引かなくてもよいであろう．なぜなら，先に定言命法とその方式とを解明した際に用いた諸実例は，ここでもすべて同じ目的に役立つであろうから．(Also würde das Princip eines jeden menschlichen Willens,als eines durch alle seine Maximen allgemein gesetzgebenden Willens,wenn es sonst mit ihm nur seine Richtigkeit hätte,sich zum kategorischen Imperativ darin gar wohl schicken,daß es eben um der Idee der allgemeinen Gesetzgebung willen sich auf kein Interesse gründet und also unter allen möglichen Imperativen allein unbedingt sein kann；oder noch besser,indem wir den Satz umkehren：wenn es einen kategorischen Imperativ giebt（d.i.ein Gesetz für jeden Willen eines vernünftigen Wesens）,so kann er nur gebieten,alles aus der Maxime seines Willens als eines solchen zu thun,der zugleich sich selbst als allgemein gesetzgebend zum Gegenstande haben könnte；denn alsdann nur ist das praktische Princip und der Imperativ,dem er gehorcht,unbedingt,weil er gar kein Interesse zum Grunde haben kann.)」（同上，94頁）

(95)

「［意志の自律の原理と他律の原理］道徳性の原理［道徳的な善い生き方］を発見するためにこれまでなされてきたすべての労苦を顧みるとき，なぜそれらの労苦がことごとく失敗しなければならなかったかは，いまやなんら不思議ではない．ひとびとは，人間が自らの義務によって［道徳］法則に繋がれているのを見たが，人間がただ自分自身の，にもかかわらず普遍的な立法に従っていることに，また人間が自分自身の，だが自然目的［Naturzweck］からすれば普遍的に立法する意志に従って行為する［生きる］ように義務づけられているだけであることに，気付かなかったのである．なぜなら，ひとびとが人間をたんに法則（どのような法則であれ）に従う者と考えたとき，この法則はなんらかの関心［傾向性］を魅力もしくは強制［Reiz oder Zwang］として伴わなければならなかったからで，それと言うのも，この法則は法則として自分の意志から生じたのではなく，この意志は法則に適合してなにか他のものによってある種の仕方で行為する［生きる］ように強制された［genöthigt］からである．だがこのまったく必然的な帰結によって，義務の最上の根拠を見いだそうとするあらゆる労力は，とりかえしがつかないほど空費されたのであった．と言うのも，ひとびとが手に入れたのは［厳密に言えば］義務では決してなく，ある種の関心［傾向性］から生ずる行為［生きること］の必然性であったからである．この関心［傾向性］は，自分の関心であったかもしれないし，他人の関心であったかもしれない．しかしいずれにせよその場合に，命法はつねに［関心・傾向性によって］条件づけられたものとならなければならなかったし，道徳的命令［das moralische Gebot］の資格をもつことは決してできなかった．私はそこでこの原則［原理］を，ほかのすべての原理［生き方］に対立させて意志の自律［Autonomie］の原理［生き方＝生きることのアルケー・自律的生き方］と名付け，このほか

の原理［生き方］のほうをそれゆえ他律［Heteronomie・他律的生き方］に数えようと思う．(Es ist nun kein Wunder,wenn wir auf alle bisherige Bemühungen,die jemals nuternommen worden,um das Princip der Sittlichkeit ausfindig zu machen,zurücksehen,warum sie insgesammt haben fehlschlagen müssen.Man sah den Menschen durch seine Pflicht an Gesetze gebunden,man ließ es sich aber nicht einfallen,daß er nur seiner eigenen und dennoch allgemeinen Gesetzgebung unterworfen sei,und daß er nur verbunden sei,seinem eigenen,dem Naturzwecke nach aber allgemein gesetzgebenden Willen gemäß zu handeln.Denn wenn man sich ihn nur als einem Gesetz（welches es auch sei）unterworfen dachte：so mußte dieses irgend ein Interesse als Reiz oder Zwang bei sich führen,weil es nicht als Gesetz aus seinem Willen entsprang,sondern dieser gesetzmäßig von etwas anderm genöthigt wurde,auf gewisse Weise zu handeln.Durch diese ganz nothwendige Folgerung aber war alle Arbeit,einen obersten Grund der Pflicht zu finden,unwiederbringlich verloren.Denn man bekam niemals Pflicht,sondern Nothwendigkeit der Handlung aus einem gewissen Interesse heraus.Dieses mochte nun ein eigenes oder fremdes Interesse sein.Aber alsdann mußte der Imperativ jederzeit bedingt ausfallen und konnte zum moralischen Gebote gar nicht taugen.Ich will also diesen Grundsatz das Princip der Autonomie des Willens im Gegensatz mit jedem andern,das ich deshalb zur Heteronomie zähle,nennen.)」(140～141頁)

*これまで，「善い意志」の本質としての義務，義務の存立根拠としての定言命法，定言命法の存立根拠としての人格，そして人格の存立根拠としての「意志の自律」が解明されてきた．「意志の自律」とは，「普遍的自己立法と自己服従」を指し，これによって，定言命法の存立可能性は，まだ最後的にではないにしても，ひとまず根拠づけられた，と見てよいであろう．(85) の補注を引き継いで言えば，「人格」とは「自律的意志の主体」なのである．人格は，そのようなものとして「善い意志」なのであり，物件のもたない絶対的価値あるいは尊厳性を有するのである．

(96)

「［諸目的の国というきわめて実り豊かな概念］おのおのの理性的存在者は，自分を自分を自らの意志のあらゆる格率を通じて普遍的に立法するものと見なければならず，この観点から自分自身と自分の行為［生きること］とを［道徳的に］判定［価値判断］しなければならないが，こうした理性的存在者の概念は，それと結び付いたきわめて実り豊かな概念に，すなわち［諸］目的の国という概念に，導くのである．(Der Begriff eines jeden vernünftigen Wesens,das sich durch alle Maximen seines Willens als allgemein gesetzgebend betrachten muß,um aus diesem Gesichtspunkte sich selbst und seine Handlungen zu beurtheilen,führt auf einen ihm anhängenden sehr fruchtbaren Begriff, nämlich den eines Reichs der Zwecke.)」(同上，141～142頁)

(97)

「［諸目的の国の「国」という意味］ところで私は，国ということで，それぞれ異なった［諸］理性的存在者が共同の［諸］法則によって体系的に結合していることを理解する．さて，［諸］法則は，さまざまな［主観的］目的をそれらの普遍的妥当性にかんして規定するから，［諸］理性的存在者の個人的相違と，同時にかれらの私的目的の全内容を捨象すると，体系的に結合したすべての目的の全体（目的それ自体としての理性的存在者たちと，おのおのの理性的存在者が自

分自身で設定するような自分の諸目的との全体）が，すなわち［諸］目的の国が，考えられることができるが，このことは上述の諸原理［善く生きるための根本指針としての定言命法の諸方式］によって可能なのである．（Ich verstehe aber unter einem Reiche die systematische Verbindung verschiedener vernünftiger Wesen durch gemeinschaftliche Gesetze.Weil nun Gesetze die Zwecke ihrer allgemeinen Gültigkeit nach bestimmen,so wird,wenn man von dem persönlichen Unterschiede vernünftiger Wesen,imgleichen allem Inhalte ihrer Privatzwecke abstrahirt,ein Ganzes aller Zwecke（sowohl der vernünftigen Wesen als Zwecke an sich,als auch der eigenen Zwecke,die ein jedes sich selbst setzen mag）in systematischer Verknüpfung,d.i.ein Reich der Zwecke,gedacht werden können,welches nach obigen Principien möglich ist.）」（同上，142頁）

(98)
「［諸目的の国の「諸目的」という意味］なぜなら，［上述の原理（定言命法の目的自体の方式）に従えば］理性的存在者はすべて，そのおのおのが自分自身とすべての他人を決してたんに手段としてのみではなく，つねに同時に［jederzeit zugleich］目的それ自体として扱うべきである，という法則の下にある．このことによって，共同的な客観的法則による理性的存在者の体系的結合が，すなわち一つの国が生ずるのであって，この国は，この法則がまさに目的と手段としてのこれら理性的存在者相互の関係を目指しているから，［諸］目的の国（もとより理想［Ideal］であるにすぎないが）とよばれることができるのである．（Denn vernünftige Wesen stehen alle unter dem Gesetz,daß jedes derselben sich selbst und alle andere niemals bloß als Mittel,sondern jederzeit zugleich als Zweck an sich selbst behandeln solle.Hiedurch aber entspringt eine systematische Verbindung vernünftiger Wesen durch gemeinschaftliche objective Gesetze,d.i.ein Reich,welches,weil diese Gesetze eben die Beziehung dieser Wesen auf einander als Zwecke und Mittel zur Absicht haben,ein Reich der Zwecke（freilich nur ein Ideal）heißen kann.）」（同上，142頁）

(99)
「［諸目的の国における成員と元首たるの資格①］ところで理性的存在者は，「諸」目的の国においてなるほど普遍的に立法するが，しかしまたこの法則に自ら服従している［すなわち定言命法の自律の方式に従っている］ときには，この「諸」目的の国に成員［Glied］として所属する．理性的存在者が立法する者として，ほかの理性的存在者の意志になんら服従していないとき，この者は［諸］目的の国に元首［Oberhaupt］として所属する．（Es gehört aber ein vernünftiges Wesen als Glied zum Reiche der Zwecke,wenn es darin zwar allgemein gesetzgebend,aber auch diesen Gesetzen selbst unterworfen ist.Es gehört dazu als Oberhaupt,wenn es als gesetzgebend keinem Willen eines andern unterworfen ist.）」（同上，142～143頁）

(100)
「［諸目的の国における成員と元首たるの資格②］理性的存在者は，成員としてであれ，元首としてであれ，自らをつねに，意志の自由［＝自律］によって可能な［諸］目的の国において立法するものと見なければならない．だが理性的存在者は，この元首の地位を，たんに自らの意志の格率によっては主張できず，完全に非依存的な［unabhängig］存在者として，欲求［傾向性］もなければ，［善い］意志に完全に適合した能力が制限されてもいないといった場合にのみ，主

張できるのである．(Das vernünftige Wesen muß sich jederzeit als gesetzgebend in einem durch Freiheit des Willens möglichen Reiche der Zwecke betrachten,es mag nun sein als Glied,oder als Oberhaupt.Den Platz des letztern kann es aber nicht bloß durch die Maxime seines Willens,sondern nur alsdann,wenn es ein völlig unabhängiges Wesen ohne Bedürfnis und Einschränkung seines dem Willen adäquaten Vermögens ist,behaupten.)」(同上，143頁)

(101)

「[諸目的の国の成員の格率と義務①] それゆえ，道徳性は，あらゆる行為が，ただそれによってのみ［諸］目的の国が可能な立法にかかわることにおいて成立する．だがこの立法は，おのおのの理性的存在者自身のうちに見いだされなければならず，その者の［善い］意志から発現しうるのでなければならないのであって，それゆえこの［善い］意志の原理［自律の方式］は，次のようになる．いかなる行為も，次の格率以外の格率に従ってなされてはならないが，その格率とは普遍的法則となることもできる格率であり，それゆえ［善い］意志がその格率を通じて自分自身を同時に普遍的に立法するものと見ることができるような格率である，と．ところで格率は，普遍的に立法するものとしての理性的存在者のこの客観的原理［自律の方式］に，その本性上必然的に一致するといったものではないから，かの原理［自律の方式］による行為［生きること］の必然性は，実践的強制すなわち義務［praktische Nöthigung,d.i.Pflicht］とよばれる．義務は［諸］目的の国における元首には帰属しないが，しかし成員のおのおのに，しかもすべてに等しい割合で帰属するのである．(Moralität besteht also in der Beziehung aller Handlung auf die Gesetzgebung,dadurch allein ein Reich der Zwecke möglich ist.Diese Gesetzgebung muß aber in jedem vernünftigen Wesen selbst angetroffen werden und aus seinem Willen entspringen können,dessen Princip also ist：keine Handlung nach einer andern Maxime zu thun,als so,daß es auch mit ihr bestehen könne,daß sie ein allgemeines Gesetz sei,und also nur so,daß der Wille durch seine Maxime sich selbst zugleich als allgemein gesetzgebend betrachten könne.Sind nun die Maximen mit diesem objectiven Princip der vernünftigen Wesen,als allgemein gesetzgebend,nicht durch ihre Natur schon nothwendig einstimmig,so heißt die Nothwendigkeit der Handlung nach jenem Princip praktische Nöthigung,d.i.Pflicht.Pflicht kommt nicht dem Oberhaupte im Reiche der Zwecke,wohl aber jedem Gliede und zwar allen in gleichem Maße zu.)」(同上，143～144頁)

(102)

「[諸目的の国の成員の格率と義務②] この原理［自律の方式］に従って行為するという実践的必然性［必然的生き方］，すなわち義務は，感情や衝動や傾向性には決して基づいていず，たんに理性的存在者相互の関係［目的自体の方式］にのみ基づいているが，この関係においてはある理性的存在者の［善い］意志は［目的それ自体としてのみにとどまらず］いつも同時に［jederzeit zugleich］立法するもの［gesetzgebend］と見られなければならない．さもなければ，［実践］理性はこの理性的存在者を目的それ自体［Zweck an sich selbst］として考えることができないであろう．それゆえ［実践］理性は，普遍的に立法するもの［allgemein gesetzgebend］としての［善い］意志のおのおのの格率を，ほかのおのおのの［善い］意志に，また自分自身に対する［つまり自他に対する］おのおのの行為に，関係づけるのであって，しかもこのことを，なにかほかの実践的動因や将来の利益のためになすのではなく，［目的それ自体であることと］同時に自らが与える［道徳］法則以外のいかなる［道徳］法則にも服従しない［自己立法＝自己服従

という自律］という，理性的存在者の尊厳の理念［Idee der Würde］に基づいてなすのである．（Die praktische Nothwendigkeit nach diesem Princip zu handeln,d.i.die Pflicht,beruht gar nicht auf Gefühlen,Antrieben und Neigungen,sondern bloß auf dem Verhältnisse vernünftiger Wesen zu einander,in welchem der Wille eines vernünftigen Wesens jederzeit zugleich als gesetzgebend betrachtet werden muß,weil es sie sonst nicht als Zweck an sich selbst denken könnte.Die Vernunft bezieht also jede Maxime des Willens als allgemein gesetzgebend auf jeden anderen Willen und auch auf jede Handlung gegen sich selbst und dies zwar nicht um irgend eines andern praktischen Bewegungsgrundes oder künftigen Vortheils willen,sondern aus der Idee der Würde eines vernünftigen Wesens,das keinem Gesetze gehorcht als dem,das es zugleich selbst giebt.）」（同上，144頁）

（103）

「［価格と尊厳①］［諸］目的の国においては，すべてのものは，価格［Preis］をもつか，尊厳［Würde］をもつか，そのいずれかである．価格をもつものは，そのもののかわりになにかほかのものが等価物［Äquivalent］とされることができる．これに反して，あらゆる価格を越えていて，したがっていかなる等価物もゆるさないものは，尊厳をもつのである．（Im Reiche der Zwecke hat alles entweder einen Preis,oder eine Würde.Was einen Preis hat,an dessen Stelle kann auch etwas anderes als Äquivalent gesetzt werden；was dagegen über allen Preis erhaben ist,mithin kein Äquivalent verstattet,das hat eine Würde.）」（同上，146頁）

（104）

「［価格と尊厳②］人間の普遍的な傾向性と欲求とに関係するものは，市場価格［Marktpreis］をもつ．欲求を前提しなくても，ある種の趣味［Geschmack］に，つまりわれわれの心の諸力のたんなる無目的な戯れにおける適意［Wohlgefallen］に，適合するものは，感情価格［Affectionspreis］をもつ．だがあるものがその下でのみ目的それ自体であることができる条件をなすもの［定言命法＝道徳性・道徳的に善く生きること］は，たんに相対的価値すなわち価格［ein relativer Werth,d.i.ein Preis］をもつのではなく，内的［絶対的］価値すなわち尊厳［ein innerer Werth,d.i.Würde］をもつのである．（Was sich auf die allgemeinen menschlichen Neigungen und Bedürfnisse bezieht,hat einen Marktpreis；das,was,auch ohne ein Bedürfnis vorauszusetzen,einem gewissen Geschmacke,d.i.einem Wohlgefallen am bloßen zwecklosen Spiel unserer Gemüthskräfte,gemäß ist,einen Affectionspreis；das aber,was die Bedingung ausmacht,unter der allein etwas Zweck an sich selbst sein kann,hat nicht bloß einen relativen Werth,d.i.einen Preis,sondern einen innern Werth,d.i.Würde.）」（同上，146頁）

（105）

「［価格と尊厳③］さて，道徳性［＝定言命法・道徳的に善く生きること］は，その下でのみ理性的存在者が目的それ自体であることができる条件である．なぜなら，理性的存在者は，道徳性を通じてのみ［諸］目的の国における立法的成員［ein gesetzgebend Glied］であることが可能だからである．道徳性と，道徳性をそなえることができる人間性［Sittlichkeit und die Menschheit,so fern sie derselben fähig ist,］とが，それのみが尊厳［Würde］をもつ当のものである．仕事における熟練や勤勉は，市場価格［Marktpreis］をもつ．機知や生き生きとした想像力や陽

気は，感情価格［Affectionspreis］をもつ．これに対して，約束における誠実さや原則［義務］に基づく（本能［傾向性］に基づくのではない）好意［Wohlwollen］は，［絶対的］内的価値をもつ．自然も人為も，それら［絶対的］内的価値をもつものが［ある人間に］欠けているときに，それらのかわりとすることができるようななにものも含んでいない．なぜなら，それらがもつ［絶対的内的］価値は，それらから生ずる結果や，それらがもたらす利益や効用に存するのではなく，［道徳的］心術［Gesinnung］のうちに，すなわちたとえ好結果が生じなくても，自分をそうした仕方で［義務に基づいて］行為のうちで明らかにしようとしている［善い］意志の格率のうちに，存するからである．これらの［義務に基づいた］行為はまた，これらの［義務に基づいた］行為を直接的な愛好や適意をもって見るなんらかの主観的な性向や趣味による推薦を必要としないし，またそうした［義務に基づく］行為にむかう直接的な性癖や感情を必要としない．これらの［義務に基づく］行為は，これらの［義務に基づく］行為をなす［善い］意志を直接的な尊敬［Achtung］の対象として示すのであり，さらにこれらの［義務に基づく］行為を［善い］意志に課すためには［実践］理性のみが必要であって，［実践］理性はこれらの［義務に基づく］行為を［善い］意志にこびさせるために必要なのではない．後で述べたようなことは，義務の場合，なんとしても矛盾であろう．それゆえ［(善い）意志の］こうした評価［Schätzung］は，このような心構えの価値であることを気付かせ，この尊厳という価値をあらゆる価格を無限に越えたところに置くのであって，尊厳を価格で見積もったり価格と比較したりすることはまったく不可能である．そのようなことをすれば，それは尊厳性のもつ神聖性［Heiligkeit］をいわば冒瀆することになる．(Nun ist Moralität die Bedingung,unter der allein ein vernünftiges Wesen Zweck an sich selbst sein kann,weil nur durch sie es möglich ist,ein gesetzgebend Glied im Reiche der Zwecke zu sein.Also ist Sittlichkeit und die Menschheit,so fern derselben fähig ist,dasjenige,was allein Würde hat.Geschicklichkeit und Fleiß im Arbeiten haben einen Marktpreis；Witz,lebhafte Einbildungskraft und Launen einen Affectionspreis；dagegen Treue im Versprechen,Wohlwollen aus Grundsätzen（nicht aus Instinct）haben einen innern Werth.Die Natur sowohl als Kunst enthalten nichts,was sie in Ermangelung derselben an ihre Stelle setzen könnten；denn ihr Werth besteht nicht in den Wirkungen,die daraus entspringen,im Vortheil und Nutzen,den sie schaffen,sondern in den Gesinnungen,d.i.den Maximen des Willens,die sich auf diese Art in Handlungen zu offenbaren bereit sind,obgleich auch der Erfolg sie nicht begünstigte.Diese Handlungen bedürfen auch keiner Empfehlung von irgend einer subjectiven Disposition oder Geschmack,sie mit unmittelbarer Gunst und Wohlgefallen anzusehen,keines unmittelbaren Hanges oder Gefühles für dieselbe：sie stellen den Willen,der sie ausübt,als Gegenstand einer unmittelbaren Achtung dar,dazu nichts als Vernunft gefordert wird,um sie dem Willen aufzuerlegen,nicht von ihm zu erschmeicheln,welches letztere bei Pflichten ohnedem ein Widerspruch wäre.Diese Schätzung giebt also den Werth einer solchen Denkungsart als Würde zu erkennen und setzt sie über allen Preis unendlich weg,mit dem sie gar nicht in Anschlag und Vergleichung gebracht werden kann,ohne sich gleichsam an der Heiligkeit derselben zu vergreifen.)」（同上，146～147頁）

＊「価格（Preis)」とは，なにかに役立つもの，「利用価値」をもったもの，「利益や効用」，便益，利便さなどの「外的価値」をもったもの，などを意味するのであろう．「価格」とは，畢竟，「物件の相対的価値」を指す．「価値」とは，「人格の絶対的価値」を指す．

「尊厳」とは，『岩波国語辞典』によれば，「尊く，厳かで，犯してはならないこと．気高く，

威厳があること」とある．「尊厳」とは，畢竟，「人格の絶対的価値」を指す．

「神聖」とは，同じ辞典によれば，「尊くて，犯し難いこと．清らかで穢れがないこと」とある．「神聖」については，宇都宮氏の『カントと神』を見られたい．そこでの結論は，「神聖」は二義的であり，感性的人間にとっては「畏怖すべきもの」であり，英知的人間にとっては「魅するもの」である，とされる．

(106)

「［自律と尊厳］では，道徳的に善い心術［すぐれた魂＝善い意志］もしくは徳［道徳性］にこれほど高い要求をなす権利を与えるものは，いったいなんであろうか．それは，道徳的に善い心術もしくは徳が，理性的存在者に与える普遍的立法への関与［Antheil］にほかならないのであって，この関与を通じて理性的存在者に可能な［諸］目的の国の成員の資格を与えるのである．もっとも理性的存在者は，そのもの独自の本性［実践理性］によってすでに［諸］目的の国の成員であるべく定められていたのであって，理性的存在者は目的それ自体として，そしてまさにそのゆえに［諸］目的の国において立法するものとして，すべての自然法則にかんして自由であり，自分自身が与える［道徳］法則にのみ服従する．そしてかれの格率は，この［道徳］法則に従って普遍的立法（かれは同時に進んでこの立法に自らを服従させる）に帰属することができるのである．と言うのも，なにものも［道徳］法則がそのものに定める価値のほかには，価値をもつもつことはないからである．ところですべてのものに価値を定める立法そのものは，まさにそのゆえに尊厳を，すなわち無条件的で比較を絶した価値を［eine Würde,d.i.unbedingten,unvergleichbaren Werth］もたざるをえないのであって，この価値に対しては，尊敬［Achtung］という言葉だけが，それについて理性的存在者がなすべき評価［Schätzung］の適切な表現を与えるのである．それゆえ，自律［Autonomie］が，人間およびあらゆる理性的存在者の尊厳の根拠［Grund der Würde］である．（Und was ist es denn nun,was die sittlich gute Gesinnung oder die Tugend berechtigt,so hohe Ansprüche zu machen？Es ist nichts Geringeres als der Antheil,den sie dem vernünftigen Wesen an der allgemeinen Gesetzgebung verschafft und es hiedurch zum Gliede in einem möglichen Reiche der Zwecke tauglich macht,wozu es durch seine eigene Natur schon bestimmt war,als Zweck an sich selbst und eben darum als gesetzgebend im Reiche der Zwecke,in Ansehung aller Naturgesetze als frei,nur denjenigen allein gehorchend,die es selbst giebt und nach welchen seine Maximen zu einer allgemeinen Gesetzgebung（der es sich zugleich selbst unterwirft）gehören können.Denn es hat nichts einen Werth als den,welchen ihm das Gesetz bestimmt.Die Gesetzgebung selbst aber,die allen Werth bestimmt,muß eben darum eine Würde,d.i.unbedingten,unvergleichbaren Werth,haben,für welchen das Wort Achtung allein den geziemenden Ausdruck der Schätzung abgiebt,die ein vernünftiges Wesen über sie anzustellen hat,Autonomie ist also der Grund der Würde der menschlichen und jeder vernünftigen Natur.）」（同上，148～149頁）

＊「尊敬（Achtung）」とは，国語辞典によれば，「他人の人格や行為を高いものと認め，頭を下げるような，またついて行きたいような気持ちになること．うやまうこと．」とある．「尊敬」についてのカントの考えについては，本書第30段落の「原注」（48～49頁）を見られたい．カントは，「道徳法則に対する尊敬」などと言うが，「道徳法則」を「敬う」という気持ちは，畢竟，自律［Autonomie］への驚嘆の念なのでもあろう．カントはそこに，人間らしさ，人間の意味，人間の尊厳，人間の尊さ，人間の矜持を見た，というのが，私の読み方である．

(107)

「[定言命法と三つの格率方式――形式・実質・諸目的の国――] 道徳性の原理 [人間らしく善く生きるための根本指針] を示す上述の三様式 [自然法則の方式・目的自体の方式・自律の方式] は，根本においては，同一の [道徳] 法則 [基本方式] の三つの [派生的] 方式にすぎず，それらのどの一方式も他の二方式をおのずから自らのうちに合わせ含んでいる．けれども，それらの間には，客観的＝実践的 [な道徳法則上の区別] と言うよりも主観的＝実践的な [道徳法則に従って生きる際の個々人の格率上の] 区別がなお存在するのであって，これ [個々人の格率の相違] は理性の理念 [eine Idee der Vernunft] を直観 [Anschauung] に（一種の類比によって）いっそう近づけ，そのことでそれをいっそう感情 [Gefühl] に近づけるのに役立つのである．すなわち，すべての格率は，(Die angeführten drei Arten,das Princip der Sittlichkeit vorzustellen,sind aber im Grunde nur so viele Formeln eben desselben Gesetzes,deren die eine die anderen zwei von selbst in sich vereinigt.Indessen ist doch eine Verschiedenheit in ihnen,die zwar eher subjectiv als objectiv＝praktisch ist,nämlich um eine Idee der Vernunft der Anschauung (nach einer gewissen Analogie) und dadurch den Gefühle näher zu bringen.Alle Maximen haben nämlich)

(108)

「(1) [格率の形式] [すべての格率は] 形式をもつ．形式の本領は普遍性であり，そこで道徳的命法の方式は次のように表現される．格率は，あたかもそれが普遍的自然法側として妥当するかのように，選ばれなければならない，と．([1] eine Form,welche in der Allgemeinheit besteht,und da ist die Formel des sittlichen Imperativs so ausgedrückt：daß die Maximen so müssen gewählt werden,als ob sie wie allgemeine Naturgesetze gelten sollten；)」(同上，150頁)

(109)

「(2) [格率の実質] [すべての格率は] 実質，すなわち目的をもつ．そこで方式は次のように言う．理性的存在者は，その本性上 [客観的] 目的として，したがって目的それ自体として，おのおのの格率に対してたんに相対的で随意的なすべての [主観的] 目的を制限する条件として役立たなければならない，と．([2] eine Materie,nämlich einen Zweck,und da sagt die Formel：daß das vernünftige Wesen als Zweck seiner Natur nach,mithin als Zweck an sich selbst jeder Maxime zur einschränkenden Bedingung aller bloß relativen und willkürlichen Zweck dienen müsse；)」(同上，150頁)

(110)

「(3) [諸目的の国] [すべての格率は] あらゆる格率の完全な規定を次の方式によってもつ．すなわちそれは，あらゆる格率は自らの立法に基づいて，自然の国 [Reich der Natur] *としての可能な [諸] 目的の国 [Reich der Zwecke] を目指して調和すべきである，という方式である．[4] [三つの格率方式の順序は「量のカテゴリー」に基づく] ここでは，[三つの格率方式の進行は] 意志の形式（意志の普遍性）の単一性のカテゴリー [Kategorie der Einheit]，実質（客観すなわち目的）の数多性のカテゴリー [Kategorie der Vielheit]，および目的の体系という総体性もしくは全体性のカテゴリー [Kategorie der Allheit oder Totalität] をたどるという形でなされている．[5] [総括] けれども，道徳的な判定 [価値判断] に際しては，つねにもっとも厳密

な方法に従うほうがよいし，そこで「自分自身を同時に普遍的法則となすことができる格率に従って行為せよ［生きよ］」という，定言命法の普遍的方式を基礎とするほうがよいであろう．しかし道徳法則を同時に受け入れやすくしようと思えば，同じ行為を上述の三つの概念［形式・実質・目的の国］によって導き，そうすることでその行為をできるだけ直観に近づけることが，きわめて有効な方法であろう．

目的論［Teleologie］は自然を［諸］目的の国として考え，道徳は可能な［諸］目的の国を自然の国として考える．目的論では，［諸］目的の国は，現に存在するものを解明するための理論的理念［eine theoretische Idee］である．道徳では，［諸］目的の国は実践的理念［eine praktische Idee］であって，それは現に存在してはいないが，われわれの行動によって現実的になることができるものを，まさにこの理念に適合して実現させるためのものである．（［3］eine vollständige Bestimmung aller Maximen durch jene Formel,nämlich：daß alle Maximen aus eigener Gesetzgebung zu einem möglichen Reiche der Zwecke,als einem Reiche der Natur,zusammenstimmen sollen.Der Fortgang geschieht hier wie durch die Kategorien der Einheit der Form des Willens（der Allgemeinheit desselben）,der Vielheit der Materie（der Objecte,d.i.der Zwecke）und der Allheit oder Totalität des Systems derselben.Man thut aber besser,wenn man in der sittlichen Beurtheilung immer nach der strengen Methode verfährt und die allgemeine Formel des kategorischen Imperativs zum Grunde legt：handle nach der Maxime,die sich selbst zugleich zum allgemeinen Gesetze machen kann.Will man aber dem sittlichen Gesetze zugleich Eingang verschaffen：so ist sehr nützlich,ein und eben dieselbe Handlung durch benannte drei Begriffe zu führen und sie dadurch,so viel sich thun läßt,der Anschauung zu nähern.

*Die Teleologie erwägt die Natur als ein Reich der Zwecke,die Moral ein mögliches Reich der Zwecke als ein Reich der Natur.Dort ist das Reich der Zwecke eine theoretische Idee zu Erklärung dessen,was da ist.Hier ist es eine praktische Idee,um das,was nicht da ist,aber durch unser Thun und Lassen wirklich werden kann,und zwar eben dieser Idee gemäß zu Stande zu bringen.）」（同上，150～151頁）

(111)

「［端的無条件に善い意志の方式としての定言命法］いまやわれわれは，われわれがはじめに出発した地点において，すなわち無条件的に善い意志の概念において，行程を終えることができる．悪であることが不可能な意志，したがってその格率が普遍的法則とされたときに，自分自身と矛盾［自己矛盾］することがまったく不可能な意志，そのような意志が端的に善いのである．［①基本方式］それゆえこの原理［定言命法］はまた，意志の最上の［道徳］法則であって，それは「格率の法則としての普遍性を汝が同時に意欲することができるような，そうした格率につねに従って行為せよ」である．これは意志が自分自身と矛盾［自己矛盾］することがまったく不可能な唯一の条件であって，こうした命法は定言的である．［②自然法則の方式］可能な行為に対する普遍的法則としての意志の妥当性は，自然一般の形式的性格としての，普遍的法則に従う諸事物の現存の普遍的結合と類似しているから，定言命法はまた次のようにも表現できる．「自分自身を同時に普遍的自然法則と見なすことができるような格率に従って行為せよ［生きよ］」，と．こうして端的に善い意志の方式が得られたのである．（Wir können nunmehr da endigen,von

wo wir im Anfange ausgingen,nämlich dem Begriffe eines unbedingt guten Willens.Der Wille ist schlechterdings gut,der nicht böse sein,mithin dessen Maxime,wenn sie zu einem allgemeinen Gesetze gemacht wird,sich selbst niemals widerstreiten kann.Dieses Princip ist also auch sein oberstes Gesetz：handle jederzeit nach derjenigen Maxime,deren Allgemeinheit als Gesetzes du zugleich wollen kannst；dieses ist die einzige Bedingung,unter der ein Wille niemals mit sich selbst im Widerstreite sein kann,und ein solcher Imperativ ist kategorisch.Weil die Gültigkeit des Willens als eines allgemeinen Gesetzes für mögliche Handlungen mit der allgemeinen Verknüpfung des Daseins der Dinge nach allgemeinen Gesetzen,die das Formale der Natur überhaupt ist,Analogie hat,so kann der kategorische Imperativ auch so ausgedrückt werden：Handle nach Maximen,die sich selbst zugleich als allgemeine Naturgesetze zum Gegenstande haben können.So ist also die Formel eines schlechterdings guten Willens beschaffen.)」(同上，152～153頁)

(112)

「[③目的自体の方式] 理性的存在者は，自分自身に対してある目的を設定するという点で，ほかの存在者から特に区別される．この目的は，おのおのの善い意志の実質ということになろう．だが（あれこれの目的の達成という）制限的条件をもたない端的に善い意志の理念 [Idee] においては，実現されるべき目的は（おのおのの意志をたんに相対的に善くするだけのものとして）すべてまったく捨象されなければならないから，ここでは目的は実現されるべき [主観的] 目的としてではなく，[客観的な] 自立的な目的 [selbstständiger Zweck] として，したがってたんに消極的に，つまり決してそれに反して行為してはならず，それゆえおのおのの意欲において決してたんに手段としてだけではなく，つねに同時に [jederzeit zugleich] 目的として尊重 [schätzen] されなければならないものとして，考えられなければならない．ところで，このような目的は，あらゆる可能な [主観的な] 目的の主体そのものにほかならないが，それはこの主体が同時に可能な端的に善い意志の主体だからである．と言うのも，この善い意志は，矛盾を冒さずにはほかのいかなる対象 [主観的諸目的] にも従属することができないからである．したがって，「おのおのの理性的存在者への（汝自身および他人への）関係において，理性的存在者が汝の格率のうちで同時に目的それ自体として妥当するように行為せよ [生きよ]」という原理 [目的自体の方式] と，「おのおのの理性的存在者に対する格率自身の普遍的妥当性を，同時に自らのうちに含むような格率に従って行為せよ [生きよ]」という原則 [基本方式] とは，根本において同じである．なぜなら，「私はそれぞれの [主観的] 目的に対する [その実現] 手段を使用する際に，私の格率を，その格率がおのおのの主体に対して [道徳] 法則として普遍妥当性をもつという条件の下に制限すべきである」ということは，「[主観的] 諸目的の主体すなわち理性的存在者が，決してたんに手段として，すなわちつねに同時に [jederzeit zugleich] [客観的] 目的として，行為のあらゆる格率の基礎に置かれなければならない」ということと，同じことを語っているからなのである．(Die vernünftige Natur nimmt sich dadurch vor den übrigen aus,daß sie ihr selbst einen Zweck setzt.Dieser Würde die Materie eines jeden guten Willens sein.Da aber in der Idee eines ohne einschränkende Bedingung（der Erreichung dieses oder jenes Zwecks）schlechterdings guten Willens durchaus von allem zu bewirkenden Zwecke abstrahirt werden muß（als der jeden Willen nur relativ gut machen würde）,so wird der Zweck hier nicht als ein zu bewirkender,sondern selbstständiger Zweck,mithin nur negativ gedacht werden müssen,d.i.dem niemals zuwider gehandelt,der also niemals bloß als Mittel,sondern jederzeit zugleich als Zweck in

jedem Wollen geschätzt werden muß. Dieser kann nun nichts anders als das Subject aller möglichen Zwecke selbst sein,weil dieses zugleich das Subject eines möglichen schlechterdings guten Willens ist；denn dieser kann ohne Widerspruch keinem andern Gegenstande nachgesetzt werden.Das Princip：handle in Beziehung auf ein jedes vernünftige Wesen（auf dich selbst und andere）so,daß es in deiner Maxime zugleich als Zweck an sich selbst gelte,ist demnach mit dem Grundsatze：handle nach einer Maxime,die ihre eigene allgemeine Gültigkeit für jedes vernünftige Wesen zugleich in sich enthält,im Grunde einerlei.Denn daß ich meine Maxime im Gebrauche der Mittel zu jedem Zwecke auf die Bedingung ihrer Allgemeingültigkeit als eines Gesetzes für jedes Subject einschränken soll,sagt eben so viel,als：das Subject der Zwecke,d.i.das vernünftige Wesen selbst,muß niemals bloß als Mittel,sondern als oberste einschränkende Bedingung im Gebrauche aller Mittel,d.i.jederzeit zugleich als Zweck,allen Maximen der Handlungen zum Grunde gelegt werden.)」（同上，153～154頁）

(113)

「[④自律の方式と目的それ自体としての人格] さて，以上から議論の余地なく帰結することは，[まず第一に] おのおのの理性的存在者は，目的それ自体 [Zweck an sich selbst] として，すべての [道徳] 法則にかんして，たとえ自らがそれに服従しているにしても，同時に自らを普遍的に立法するものと見ることができなければならない，ということであって，それは理性的存在者の格率が普遍的立法に適合しているというまさにこのことが，理性的存在者を目的それ自体 [Zweck an sich selbst] として特徴づけるからである．同様にして [第二に帰結することは]，すべてのたんなる自然物 [Naturwesen] にまさって理性的存在者が所有する尊厳（特権）[Würde (Prärogativ)] は，理性的存在者の格率が，つねに自分自身ならびに他のおのおのの理性的存在者を立法的な存在者 [gesetzgebendes Wesen]（それゆえにまた人格 [Person] とよばれる）と見る視点から採用されなければならないことを，自らに伴っている，ということである．[第三に] さて，このようにしてさまざまな理性的存在者の世界（mundus intelligibilis 英知界）が [諸] 目的の国 [Reich der Zwecke] として，しかも成員 [Glied] であるすべての人格 [Person] の自己立法 [die eigene Gesetzgebung] によって，可能となる．したがって，おのおのの理性的存在者は，自らの格率を通じてつねにあたかも自らが [諸] 目的の普遍的な国の立法的成員 [ein gesetzgebendes Glied im allgemeinen Reiche der Zwecke] であるかのように行為し [生き] なければならない．この格率の形式的原理は，「あたかも汝の格率が同時に（あらゆる理性的存在者の）普遍的法則に役立つかのように行為せよ [生きよ]」ということである．[第四に] それゆえ，[諸] 目的の国は，自然の国 [Reich der Natur] との類比によってのみ可能であるが，もっとも前者は，格率すなわち自分自身に課した [行動・生活] 規則 [Maximen,d.i.sich selbst auferlegten Regeln] によってのみ可能であり，後者は，外的に強制的に作用する原因の [自然] 法則によってのみ可能なのである．それにもかかわらず，ひとは自然全体に対し，それがたとえ機械として見られるにしても，なおそれが自らの [諸] 目的としての理性的存在者にかかわる限りにおいて，こうした理由 [法則によってのみ可能であるということ] をもとに，自然の国 [「体系的結合」，第97段落参照] という名を与えることができる．[第五に] ところでこのような [諸] 目的の国は，定言命法がすべての理性的存在者に指定する規則を含む格率を通じて，その格率が普遍的に守られるならば，現実に生起するであろう．けれども，理性的存在者は，たとえ自分がこの格率を忠実に守るとしても，それだからといって他のおのおのの理性的存在者がそれ

と同じ格率に忠実であるだろうと期待することはできないし，同様にして自然の国とその国の合目的的な秩序とが，かれ自身によって可能な［諸］目的の国にふさわしい成員としてのかれと調和する，つまり幸福［徳福一致，『純粋理性批判』「規準論」参照］の期待に助勢してくれるであろうと期待することもできないが，それでも「たんに可能な［諸］目的の国の普遍的に立法する成員の格率に従って行為せよ［生きよ］」という，かの［道徳］法則は，それが定言的に命ずるものであるという理由によって，些かもその力を失わないのである．［第六に］そしてこの点にまさに次の逆説が存するのであって，それはつまり，理性的存在者としての人間の尊厳は，それによってなにかほかの達成されるべき目的や利益があるわけではないが，そうした尊厳のみが，したがってたんなる理念［諸目的の国］に対する尊敬が，それにもかかわらず意志のなおざりにできない指令として役立つべきである，という逆説［「不動の動者」のごとき］であり，また，このような動機［目的や利益］のすべてに格率が依存していないというまさにこのことのうちに，この格率の崇高性［Erhabenheit］があり，おのおのの［実践］理性的主体が［諸］目的の国における立法的成員であるという主体の尊厳があるのであって，それと言うのも，もし格率が［目的や利益という動機に］依存していれば，［実践］理性的主体はたんに自らの欲求の自然法則に服従するだけのものと考えられなければならないであろうから，という逆説なのである．［第七に］またたとえ自然の国も［諸］目的の国も一人の元首の下に統一されていると考えられ，それによって［諸］目的の国がもはやたんなる理念［bloße Idee］ではなく，真の実在性［wahre Realität］を保有するとしても，このことによってかの格率にはなるほど強力な動機がさらに加わるであろうが，しかしこの格率の［本質的な］内的価値は些かも増大しないのである．なぜなら，このような［自然の国と諸目的の国との］統一が考えられるとしても，この唯一無制限な立法者［神］ですら，理性的存在者の価値を，その無私な，たんにかの理念［諸目的の国］から理性的存在者自身に指定された行動によってのみ判定［価値判断］する，と考えられなければならないからである．［第八に］そうじて諸事物の本質は，それらの外的関係によっては変化しない．こうした外的関係を顧慮しなくても，それだけで人間の絶対的価値［der absolute Werth des Menschen］をなすもの［目的それ自体としての人格］があり，人間はまたまたそのもの［目的それ自体としての人格］によって，誰からであれ，たとえ最高の存在者［das höchste Wesen・神］からであれ，判定［価値判断］されなければならないのである．［第九に］道徳性［道徳的に善く生きること］は，それゆえ，行為［生きること］が意志の自律に対してもつ関係であり，言いかえれば，行為［生きること］が意志の格率を通じて可能な普遍的立法に対してもつ関係である．［第十に］意志の自律と両立することができる行為［生きること］は許される［erlaubt］行為［生きること］であり，それ［意志の自律］と合致しない行為［生きること］は，許されない［unerlaubt］行為［生きること］である．「第十一に」意志の格率が必然的に自律の法則と合致する意志は，神聖で端的に善い意志［ein heiliger,schlechterdings guter Wille］である．［第十二に］端的に善いとは言えない意志が，自律の原理に依存していること（道徳的強制 die moralische Nöthigung）が，責務［Verbindlichkeit］である．責務は，それゆえ，神聖な存在者［神］には結び付くことができない［神は「神聖で端的に善い意志」の所有者であるから］．［第十三に］責務に基づく行為［生きること］の客観的必然性は，義務［Pflicht］とよばれる．（Nun folgt hieraus unstreitig：daß jedes vernünftige Wesen als Zweck an sich selbst sich in Ansehung aller Gesetze,denen es nur immer unterworfen sein mag,zugleich als allgemein gesetzgebend müsse ansehen können,weil eben diese Schicklichkeit seiner Maximen zur allgemeinen Gesetzgebung es als Zweck an sich selbst auszeichnet,imgleichen daß dieses seine Würde（Prärogativ）vor

allen bloßen Naturwesen es mit sich bringe,seine Maximen jederzeit aus dem Gesichtspunkte seiner selbst,zugleich aber auch jedes andern vernünftigen als gesetzgebenden Wesens (die darum auch Personen heißen) nehmen zu müssen.Nun ist auf solche Weise eine Welt vernünftiger Wesen (mundus intelligibilis) als ein Reich der Zwecke möglich und zwar durch die eigene Gesetzgebung aller Personen als Glieder.Demnach muß ein jedes vernünftige Wesen so handeln,als ob es durch seine Maximen jederzeit ein gesetzgebendes Glied im allgemeinen Reiche der Zwecke wäre.Das formale Princip dieser Maximen ist : handle so,als ob deine Maxime zugleich zum allgemeinen Gesetze (aller vernünftigen Wesen) dienen sollte.Ein Reich der Zwecke ist also nur möglich nach der Analogie mit einem Reiche der Natur,jenes aber nur nach Maximen,d.i.sich selbst auferlegten Regeln,diese nur nach Gesetzen äußerlich genöthigter wirkenden Ursachen.Dem unerachtet giebt man doch auch dem Naturganzen,ob es schon als Maschine angesehen wird,dennoch,so fern es auf vernünftige Wesen als seine Zwecke Beziehung hat,aus diesem Grunde den Namen eines Reichs der Natur.Ein solches Reich der Zwecke würde nun durch Maximen,deren Regel der kategorische Imperativ allen vernünftigen Wesen vorschreibt,wirklich zu Stande kommen,wenn sie allgemein befolgt würden.Allein obgleich das vernünftige Wesen darauf nicht rechnen kann,daß,wenn es auch gleich diese Maxime selbst pünktlich befolgte,darum jedes andere eben derselben treu sein würde,imgleichen daß das Reich der Natur und die zweckmäßige Anordnung desselben mit ihm,als einem schicklichen Gliede,zu einem durch es selbst möglichen Reiche der Zwecke zusammenstimmen,d.i.seine Erwartung der Glückseligkeit begünstigen werde,so bleibt doch jenes Gesetz : handle nach Maximen eines allgemein gesetzgebenden Gliedes zu einem bloß möglichen Reiche der Zwecke,in seiner vollen Kraft,weil es kategorisch gebietend ist.Und hierin liegt eben das Paradoxon : daß bloß die Würde der Menschheit als vernünftiger Natur ohne irgend einen andern dadurch zu erreichenden Zweck oder Vortheil,mithin die Achtung für eine bloße Idee dennoch zur unnachlaßlichen Vorschrift des Willens dienen sollte,und daß gerade in dieser Unabhängigkeit der Maxime von allen solchen Triebfedern die Erhabenheit derselben bestehe und die Würdigkeit eines jeden vernünftigen Subjects,ein gesetzgebendes Glied im Reiche der Zwecke zu sein ; denn sonst würde es nur als dem Naturgesetze seines Bedürfnisses unterworfen vorgestellt werden müssen.Obgleich auch das Naturreich sowohl,als das Reich der Zwecke als unter einem Oberhaupte vereinigt gedacht würde,und dadurch das letztere nicht mehr bloße Idee bliebe,sondern wahre Realität erhielte,so würde hiedurch zwar jener der Zuwachs einer starken Triebfeder,niemals aber Vermehrung ihres innern Werths zu statten kommen ; denn diesem ungeachtet müßte doch selbst dieser alleinige unumschränkte Gesetzgeber immer so vorgestellten werden,wie er den Werth der vernünftigen Wesen nur nach ihrem uneigennützigen,bloß aus jener Idee ihnen selbst vorgeschriebenen Verhalten beurtheilte.Das Wesen der Dinge ändert sich durch ihre äußere Verhältnisse nicht,und was,ohne an das letztere zu denken,den absoluten Werth des Menschen allein ausmacht,darnach muß er auch,von wem es auch sei,selbst vom höchsten Wesen beurtheilt werden.Moralität ist also das Verhältnis der Handlungen zur Autonomie des Willens,das ist zur möglichen allgemeinen Gesetzgebung durch die Maximen desselben.Die Handlung,die mit der Autonomie des Willens zusammen bestehen kann,ist erlaubt ; die nicht damit stimmt,ist unerlaubt.Der Wille,dessen Maximen nothwendig mit den Gesetzen der Autonomie zusammenstimmen,ist ein heiliger,schlechterdings guter Wille.Die Abhängigkeit eines nicht schlechterdings

guten Willens vom Princip der Autonomie (die moralische Nöthigung) ist Verbindlichkeit.Diese kann also auf ein heiliges Wesen nicht gezogen werden.Die objective Nothwendigkeit einer Handlung aus Verbindlichkeit heißt Pflicht.)」(同上，155～158頁)

(追記)

(1) 本書におけるカントの研究テーマは，「善く生きること」の内実の解明であろう．「善く生きる」ためには，「善い意志（すぐれた魂）」が必要である．これまでの考察によれば，「「端的に善い意志」は定言命法に従う意志として端的に善い」(訳注者の「第111段落への注解」，153頁)のである．

(2) 本稿で私は，カントにソクラテスを重ねる読解方法を意図的に採用した．カントはソクラテスの「すぐれた魂に導かれて善く生きること」について執拗に追究する，と思われるからである．こうした読解方法の根拠の一端については，拙稿「人間らしさの視座」(『北見工業大学研究報告』第31巻第2号) を見られたい．

(続)

(2001・4，札幌にて擱筆)